

協伸静塗

新社屋・工場が完成

工程一元化、生産3割増

金属製品の表面塗装加工の協伸静塗（高岡市吉久、加藤一博社長）が建設を進めていた新社屋と工場が完成し、本格稼働を始めた。新港工場（新湊市津幡江）を統合し、金属部品の被膜から塗装、出荷までの流れを一元化したことで、生産能力の三割アップを見込んでいる。総事業費は約七億円。

新港工場を統合し、被膜処理、塗装の工程を一元化した協伸静塗の新工場—高岡市吉久



敷地は五千六百四十二平方メートル。工場棟は鉄骨造り三千百八十五平方メートルで、塗料倉庫二棟も新築した。縦一一四・六メートル、横二十七メートルの長大な工場棟の造りを生かし、入荷から被膜、塗装処理、検査出荷までのラインをほぼ一列に配置。一連の工程がスムーズに進むよう配慮した。

若手技術者の育成に活

用する試験研究ブースを設けたほか、工場内のダクトを一カ所に集中

させたり、塗料の飛散を防ぐウォーター・カーチンブース四室を設置するなど、環境対応も心掛けた。これまでの工場敷地が、新たに整備される臨港道路伏木外港線に重なることに加え、新素材と被膜処理の量産対応に迫

られたことや、被膜処理剤のノンクロム化などに対応するため、旧本社工場の隣接地に用地を購入。新港工場の機能も集約し、少ロット多品種の生産に対応できる新工場の建設を進めてきた。新港工場は売却する方針。